

■わたしたちの平和宣言



私たちの考える平和

平和に形はない
だから
平和への学びは終わらない
私たちは平和について
考え続けなければならない
誓いを胸に
学校ごとに平和宣言をします



我孫子中学校



戦後80年を迎えた今年、今もなお、戦後の傷跡が残る広島で感じたこと、それは、当たり前は当たり前ではないということ。

目の前の当たり前は、いつ壊れるかわからない。だからこそ、感謝の気持ちを持ち続けたい。

私たちの使命は、私たちの声で伝えること。世界が平和になる未来に向けて。争いや差別に対して声を、上げ続けることを誓います。

「One Voice」私たちが世界を変える。

我孫子中学校 工藤 希咲・佐藤 愛純・岡田 慎司

湖北中学校



今から80年前の1945年8月6日に広島、8月9日には長崎に一発の原子爆弾が投下され、一瞬にして多くの方の命と日常生活が奪われました。

私たちは実際に広島市を訪れ、被爆体験者の方のお話や、平和祈念式典に参加し、平和の大切さや命の尊さを学びました。しかし今もなお、各国で戦争が起き、平和でない状態が続いています。

また戦後80年がたった今、被爆体験者の方が減少しています。そのため、私たちが次の世代へ語り継いでいく必要があります。

広島や長崎で起きた過ちを2度と繰り返さないために、私たちが平和への第一歩を踏み出すことを誓います。

湖北中学校 佐々木 優真・東 煌梨・宮田 夏帆

布佐中学校



80年前の8月6日、一発の原子爆弾によって広島美しい景観や多くの人々の命が失われました。その時の苦しみや絶望は色褪せることなく、今も人々の心や体に深く刻み込まれています。

今、私達が当たり前のように学校に行き、友達と話したり勉強をしたりするのはどれほど幸せで恵まれていることか、身に染みて感じました。

現在でも、世界のどこかでは戦争が起き、飢えに苦しんでいる人々がいます。そのような人を減らすために、多くの情報が錯綜するこの世の中で、その情報に振り回されることなく、正しい選択をできるようにしたいと思います。

もう2度とこのような悲惨な過ちを犯さないために、戦争の悲惨さや平和の大切さを伝え、みんなが笑って過ごせるあたたかい世界を作る一歩を踏み出すことを、ここに誓います。

布佐中学校 津原 霞蓮・園田 英治

湖北台中学校



80年前の8月6日、広島に投下されたたった一発の原子爆弾によって約14万人の命が一瞬にして奪われました。

私たちは広島を訪れ、被爆の痕跡や被爆者の方の話を伺う中で、今ある生活のありがたさを心から深く感じています。

そして今、平和で楽しく生活できていることに満足するのではなく、世界のどこかで起きている紛争や戦争に目を向け、世界唯一の被爆国である日本が平和について訴え続ける必要があると考えます。

私たちは平和について考え、次の世代に訴え続けることを誓います。

湖北台中学校 船本 歩志・菅原 颯太・福野 琴美

久寺家中学校



今から80年前、広島と長崎に原子爆弾が投下されました。

派遣団として私たちは、原爆ドームや多聞院などへと足を運び、原子爆弾の恐ろしさとその目で確かめると同時に、当たり前を当たり前にする今の環境の大切さを実感することができました。凄惨な被害を受け、草木も生えないと言われた広島が、今ではあんなにも緑が増え、とても栄えていることに広島の方々の平和への思いや復興への願いを感じ、絶対に守り続けなければいけないことだと強く思いました。

私たちの平和のゴールはここではありません。今でも世界のどこかで戦争が行われて苦しんでいる人が大勢います。苦しい思いをする人を一人でも減らせるように、私たちは行動していきます。

戦争で命を落とした方々へ追悼の意を表すとともに、被害者の思いや未来への希望を後世へ伝えて、平和を作り上げていくことを誓います。

久寺家中学校 中川 大誠・滝沢 權叶



ノーモア、ヒロシマ。ノーモア、ナガサキ。

ノーモア、ウォー。ノーモア、ヒバクシャ。

反戦と核兵器廃絶を訴えるこの言葉を、この思いを、私たちは受け継いでいかなければなりません。

原爆が投下された、1945年8月のあの日から、80年が経ちました。原子爆弾の被害を実際に受けた方からお話をいただく機会は、ますます少なくなっています。

だからこそ、私たち学生が被爆者の声をつないでいくことが必要なのではないのでしょうか。

私たちは、核兵器の残酷さ、愚かさを語り継ぎ、核廃絶、そして世界恒久平和の実現を祈り続けることを誓います。

白山中学校 水木 結菜・肥沼 さや

■令和7年度 平和事業の記録



▲「平和の集い」派遣報告を終えて

被爆80周年 我孫子市平和祈念式典

- 日時 : 令和7年8月16日(土) 午前11時から正午
場所 : 生涯学習センターアビスタ ホール
次第 : 開式の辞
千羽鶴の奉納
市長式辞
来賓挨拶・紹介
代表献花
黙祷
詩の朗読
我孫子市平和都市宣言の読み上げ
 広島派遣副団長 我孫子中学校 佐藤 愛純
広島市派遣中学生の紹介・報告
 広島派遣団長 我孫子中学校 工藤 希咲
閉式の辞
参列者献花

被爆80周年我孫子市平和祈念式典に参列した約100名は、原爆犠牲者に哀悼の意を捧げるとともに、核兵器廃絶と平和を祈りました。

原爆の恐ろしさや悲惨さ、平和の尊さを次の世代に伝えていくため、市では若い世代にも平和事業に携わってもらう工夫をしています。



◆我孫子市長 式辞

本日は、被爆80周年平和祈念式典に際し、ご来賓各位並びに我孫子市原爆被爆者の会の皆様のご臨席を賜り、厚く御礼申し上げます。

また、日頃から市の平和事業にご尽力いただいております平和事業推進市民会議、歴代の派遣中学生の皆さんに、この場をお借りし、感謝を申し上げます。

広島と長崎に原子爆弾が投下されたあの忌まわしい日から80年が過ぎました。原爆並びに先の大戦で犠牲となられた方々の御霊に対し、謹んで哀悼の誠を捧げます。

原子爆弾は、一瞬にして多くの尊い生命を奪い、辛うじて一命をとりとめた人々にも、心身共に生涯消えることのない深い傷を残しました。同じ過ちを二度と繰り返さないためには、当時の悲惨な記憶と記録を後世へ伝えていくことが重要です。

今年で21回目となる被爆地への中学生派遣では、市内6校の代表生徒15名とともに、8月5日から7日まで、広島市を訪問してまいりました。現地では、平和記念式典への参列や、被爆体験講話の聴講、全国から集まった学生との意見交換などの活動をとおして、原爆がもたらした被害や平和の大切さを学んでもらいました。派遣中学生たちは、戦争や原爆の恐ろしさを知り、平和の大切さを感じてくれたと思います。

昨日8月15日、終戦から80年目の日を迎えました。戦争体験者や被爆者の方々は年々少なくなっています。市内では、我孫子市原爆被爆者の会の皆様が、「平和の記念碑」の建立や平和祈念式典の開催、平和祈念の折り鶴展、手賀沼公園への陽光桜の植樹など、長年にわたり被爆の実相を伝える活動に取り組んでこられました。しかし、高齢化とこれに伴う会員数の減少により、活動の継続が難しくなり、令和4年3月、气象台記念公園への陽光桜の植樹をもって、その活動を閉じられました。私たちは、歴代の会長、会の皆さんの思いをしっかりと受け継いでいくため、この平和祈念式典を、我孫子市原爆被爆者の会の名を残して開催しています。

我孫子市は、唯一の被爆国として、平和都市を宣言している自治体として、今後も、被爆者の方々の平和への思いを胸に刻みながら、広島や長崎に派遣された経験をもつ若い世代をはじめとする多くの方々とともに、平和事業に取り組んでまいります。

結びに、核兵器のない世界と恒久平和の実現を強く願うとともに、本日ご臨席の皆様方のご健勝を心から祈念申し上げまして、式辞といたします。

令和7年8月16日 我孫子市長 星野 順一郎

◆我孫子市の平和事業パネル展・平和祈念の折り鶴展

平和祈念式典の開催に合わせ、「我孫子市の平和事業パネル展・平和祈念の折り鶴展」をアビスタで開催しました。我孫子市で実施している平和事業の紹介、市民の皆様から寄贈していただいた千羽鶴、我孫子市立湖北小学校の6学年の皆さんが授業の一環で作成した平和と戦争に関わる作品などを展示しました。

<展示期間> 8月15日(金)～8月29日(金)



▲寄贈していただいた千羽鶴



▲我孫子市立湖北小学校の作品

あびこ平和の日 ～伝える・祈る・つなぐ～

戦後 80 年が経過し、戦争体験者や原爆の被害に遭われた方が少なくなっている中、平和の尊さを継承することの重要性が増しています。

広島と長崎に原子爆弾が投下され、第二次世界大戦が終結した 8 月に、平和について考えてもらうために、我孫子市平和祈念式典の開催に合わせて被爆体験伝承者による講話や子どもたちも楽しめる折り鶴体験や缶バッジづくりなどを実施しました。



▲被爆体験伝承講話



▲折り鶴作り体験



▲灯籠づくり



▲じゃぶじゃぶ池に浮かぶ灯籠

平和の集い～我孫子から平和を願う～

日時 : 令和7年12月14日(日) 午後1時30分から午後5時

場所 : けやきプラザ ホール

司会 : 平和事業推進市民会議委員

石井 歩

桐山 悟至(大学4年、平成29年度広島派遣中学生)

次第 : 開会

主催者挨拶

我孫子市長 星野 順一郎

我孫子市平和事業推進市民会議 会長 桑原 俊晴

第1部 令和7年度派遣中学生による報告

第2部 我孫子中学校演劇部による劇

「消えた八月」

第3部 佐々木祐滋 SONG LIVE

「願いを込めて～PEACE FOREVER～」

派遣中学生による報告会は、派遣事業が開始した平成17年度から、標題を変えながら続いてきました。今年度は約260名が来場し、広島派遣報告と我孫子中学校演劇部による劇、戦後80年記念事業として制作した我孫子市平和のうたの披露を含めた佐々木祐滋さんによるライブをご覧いただきました。中学生たちの発表や熱演、佐々木さんの歌声に多くの感動の声寄せられました。

この事業は市と我孫子市平和事業推進市民会議の共催事業で、準備や当日の運営を共同で行っています。また、司会を市民会議委員が務めました。



▲司会と桑原会長挨拶



▲星野市長挨拶

◆第1部 広島派遣中学生による報告

令和7年8月に広島市に派遣した中学生が、現地で学び感じたこと、平和について考えたことなどを発表しました。派遣報告の最後は、中学校ごとの「平和宣言」で締めくくられ、中学生たちは自分の言葉で平和への思いを語りました。当日の発表は15名のうち14名で行いました。



▲我孫子中学校



▲湖北中学校



▲布佐中学校



▲湖北台中学校



▲久寺家中学校



▲白山中学校

◆第2部 我孫子中学校演劇部 「消えた八月」

市内中学校唯一の演劇部である我孫子中学校演劇部は、平成25年から毎年、戦争や平和をテーマにした演劇を通して、観る人に平和の尊さを伝え続けています。今年も15名の中学生たちが一生懸命演じました。

<あらすじ>

夏休みの自由研究で「戦争体験者に聞く、第二次世界大戦の実態」をテーマにした中学生たち。8月の暑い日、戦争体験者の老夫婦に話を聞きに行くが、追い返されてしまう。

ふと家の中に目をやると、なぜかカレンダーは9月になっている。

夫婦が戦争のことを話したがるのはなぜなのか。中学生の姿を見て、夫婦は昭和20年の8月を思い返していた…。



◆第3部 佐々木祐滋 SONG LIVE「願いを込めて～PEACE FOREVER～」

戦後80年・我孫子市平和都市宣言40年を記念して「平和のうた」を制作しました。我孫子市平和事業推進市民会議が作詞した歌詞に、広島平和記念公園の「原爆の子の像」で知られる佐々木禎子さんの甥・佐々木祐滋さんが作曲しました。

平和の集いでは、平和のうたの初披露を含めた、佐々木祐滋さんによるライブが行われ、ライブの終盤には、歌の制作に携わった我孫子市平和事業推進市民会議委員やこれまで被爆地へ派遣してきた学生たちとの合唱も行われ会場を沸かせました。



◆「平和の集い～我孫子から平和を願う～」展

平和の集いの開催に合わせて、令和7年12月3日から14日までの間、けやきプラザのギャラリーで平和に関する展示を行いました。



▲けやきプラザ 第1ギャラリーの展示の様子
(中学生派遣事業・リレー講座・平和事業推進市民会議の紹介)



▲けやきプラザ 第2ギャラリーの展示の様子
(広島平和記念資料館所蔵「禎子と折り鶴ポスター」)

広島・長崎派遣中学生リレー講座「未来を生きる子どもたちへ」

実施期間 : 令和7年6月から令和8年1月まで

実施場所 : 市内の小学校13校(6年生対象、計32クラス)

講師・アシスタント参加人数 : のべ125人

広島・長崎派遣中学生リレー講座は、戦後70年記念事業として被爆地派遣経験者の学生たちが企画し、平成27年度に開始しました。広島・長崎で学び、感じたことを若い世代に伝え一緒に平和について考えてもらうため、自らが講師となり、内容を工夫しながら小学6年生に授業を行っています。

事業開始から10年間で10,300人以上の児童が受講しており、「リレー講座を受講したことをきっかけに派遣に参加した」という中学生もいて、平和のバトンが次世代につながっています。



▲R7.6.14 湖北台西小学校



▲R7.6.18 我孫子第一小学校



▲R7.6.21 新木小学校



▲R7.9.20 布佐南小学校



▲R7.10.3 湖北台東小学校



▲R7.10.11 布佐小学校



▲R7.11.15 根戸小学校



▲R7.11.15 並木小学校



▲R7.11.28 高野山小学校



▲R7.12.15 湖北小学校



▲R8.1.14 我孫子第四小学校



▲R8.1.20 我孫子第二小学校



▲R8.1.23 我孫子第三小学校

■平和祈念文集



▲千羽鶴を奉納する我孫子市派遣団

広島派遣を終えた派遣中学生による感想文です。
広島で学んだこと、感じたことを率直な自分の言葉で記しています。

『希望を持ち続けるということ』

私は、今回の広島派遣を通じて改めて命の重さや、日々の生活の大切さ、当たり前前に傍にあるものの尊さ、そして戦争の恐ろしさを学びました。三日間を通して様々な見学や講話、ディスカッションを重ね、多くの意見や想いに耳を傾けることで、自分自身の生活を振り返り、これから自分たちにできることを深く考えることができました。



私は派遣事業に参加するにあたって、戦争や原爆について調べ学習を行っていました。SNSで調べるだけでも悲惨な映像や写真が多く見つかり、戦争というものの悲惨さを考えさせられました。しかし、実際に広島を訪れ、私たちが経験したことは今までの感覚や考えを大きく変換させられ、新たな気付きを得ることができました。

一日目は原爆ドームや平和記念資料館を見学しました。原爆ドームは教科書などで見た以上に被害が大きく、現存させていることの意味を考えるきっかけとなりました。資料館ではSNSで知り得なかった被爆者の衣服や遺品、亡くなられた方々の遺書などを目にし、当時の人々の想いや原爆の恐ろしさを改めて実感しました。

二日目は平和祈念式典に参列し、その後、千羽鶴奉納やインタビュー、平和学習の集いに参加しました。式典には多くの人々や海外からの参列者もあり、広島での原爆の記憶を世界へ伝えていくことの大切さを強く感じました。インタビューでは広島出身の方や被爆二世の方にお話を伺いました。広島出身の方は「八月六日はここに来ないと落ち着かない」「子供にもきちんと伝えていきたい」と語り、被爆二世の方も「これからの世代に必ず伝えたい」とおっしゃっていました。多くの方々に共通して「伝えたい」という強い思いがあることをひとつ一つの言葉から感じるすることができました。

三日目は多聞院を見学しました。そこには被爆当時のまま残されている木材があり、鐘は毎朝八時十五分に鳴らされていると知りました。その鐘の音が後世に平和を繋いでいく役割を果たしていることを学びました。

二度目の資料館見学では、一日目には見られなかった展示や改めて見る資料があり、新たな気付きを得ることができました。本川小学校平和資料館では、爆心地に最も近い学校の一つとして残された地下室や遺品を見学し、当時の子どもたちの思いを強く感じました。資料館で衣服や遺品、当時の想いが刻まれたプレートを見たとき、胸がいっぱいになりました。戦時中の人々がどのような気持ちで毎日を生き抜いたのかは到底想像し

きれませんが、きっと厳しく辛い日々であったと思います。それでも家族や周囲と協力し、必死に生きていたのだと感じました。平和記念公園にも多くの人々や海外の方々が訪れており、原爆の恐ろしさは世界共通の記憶であり、それほどに悲惨な出来事であると、改めて実感しました。

河野さんの講話では、「戦争を体験した人はいつかは亡くなってしまう」「戦争が始まってしまうと明日という未来は無い」と涙ぐみながら語っておられました。被爆者がいづれいなくなるからこそ、今の世代が次の世代へ語り継いでいかなければならない事、その為には派遣活動やボランティアに一人でも多くの方が、積極的に参加し、伝えていくことが大切であると感じました。現在も核を保有する国は複数あり、広島に投下された原爆よりも強大な威力を持つと聞きました。もし再び戦争が起き、核が一つでも使用されれば、本当に未来は失われてしまうと痛感しました。河野さんはロシアの紛争を知り、「これまでの活動は無駄だったのか」と絶望したと語っていましたが、それでも希望を持ち続けなければ繰り返になってしまう、と強く訴えておられました。その言葉を聞き、私もまた希望を持ち信じ続けることが未来を変える一歩になるのだと感じました。

ディスカッションでは他校の方々と意見を交換しました。一人一人考えが違うからこそ、多様な視点を学び、話し合いの大切さや言葉による解決の重要性を実感しました。まずは相手を知ることが関係を変える一歩であることも学びました。

本川小学校平和資料館などで当時のものが残されているのは、原爆の恐ろしさを伝え、後世に繋げるためであることを改めて理解しました。

この三日間を通して、命の尊さや重さ、そして「当たり前」は決して当たり前ではなく、日々を大切に生きることの必要性を強く学びました。戦争は二度と、繰り返してはならず一人一人が出来る事を積極的に行い、伝え続けていかなければならない、と実感しました。争いごとがあっても力ではなく言葉で解決する姿勢が必要です。戦争を忘れず、一人でも多くの方が立ち上がることで平和に近付けるのだと思います。だからこそ、今できることを考え、行動に移すことが大切です。私自身も広島派遣で学んだことを自分の言葉で伝え、後世に繋げていきたいと思います。

『未来へつなぐ 広島での学び』



私はこの夏、我孫子市の広島派遣に参加し、3日間にわたって原爆や平和について学ぶ機会をいただきました。これまで学校の授業やテレビ、本を通して広島や原爆のことを学んできましたが、実際に現地に足を運び、自分の目で見て耳で聞いたことは、想像をはるかに超えるものでした。行く前は「知識を深める」程度の意識しかありませんでしたが、帰ってきた今は「自分自身の生き方や考え方に大きな影響を受けた」と感じています。

初めて原爆ドームを見たとき、そこに立っているだけで胸がいっぱいになりました。写真や映像で何度も見てきた建物なのに、実物はどこか冷たさと重さを放っていて、当時の悲惨さを物語っていました。壁の崩れ方や鉄骨のねじれ方、細部まで残る焼け跡を目にすると、ただ「歴史的建造物」ではなく、確かにここで多くの人が命を落とし、街全体が壊滅したという事実を突きつけられたように感じました。平和記念資料館で見た展示物はさらに衝撃的でした。焼け残った弁当箱や衣服、当時の街の写真など、一つひとつの物にその人の生活や家族の思いが詰まっていると考えると胸が苦しくなりました。どれもが「ただの物」ではなく、その人の人生の一部だったのだと気づいたとき、原爆の被害は数字や記録以上に深い悲しみを伴うものだ実感しました。

被爆者の河野さんの体験談も強く心に残っています。想像を絶する状況の中で必死に生きようとした姿が目につかび、言葉を失いました。被爆体験を語ること自体がどれほどつらいことかと思うと、勇気を持って私たちに伝えてくださったことへの感謝とともに、受け取った思いを次に伝えていく責任を感じました。

8月6日の平和記念式典にも参加しました。朝の会場は大勢の人々が集まり、静かに祈りを捧げる厳粛な雰囲気にも包まれていました。その中で一人ひとりが心の中で平和を願っていることが伝わり、国や世代を超えて同じ思いを共有できることに感動しました。しかし同時に、式典の外からはデモ隊の人々がスピーカーで大きな声を上げているのが聞こえてきました。最初はせっかくの祈りの時間を乱す行為のように思えて戸惑いましたが、次第にそれも平和の一つの姿なのかもしれないと考えるようになりました。人にはそれぞれの立場や考え方があり、声を上げることでしか伝えられない思いもあるのだと思います。平和とは単に争いがない状態ではなく、意見の違いを

どう受け止め、対話を重ねて共に歩んでいけるかにかかっているのだと実感しました。式典の静けさとデモの声、その両方を体験したことで、平和の奥深さをより強く感じることができました。

また、本川小学校の資料館を訪れたときは、子どもたちが多く犠牲になった事実に胸を打たれました。展示されていた遺品や証言から、あの日、同じように友だちと遊び、勉強し、未来を思い描いていた子どもたちが一瞬で命を奪われたことを知り、戦争は未来そのものを奪ってしまうのだと痛感しました。自分と同じ年代の子どもたちがもしそこにいたらと想像すると、悲しみと同時に強い怒りのような気持ちも湧き上がってきました。

広島で過ごした3日間は、ただ「原爆の悲惨さを学んだ」というだけでなく、自分にとって平和とは何かを考えるきっかけになりました。私にとっての平和は、戦争や核兵器がないことに加え、日常の中で安心して過ごせることや、人と人が思いやりを持って接することだと思います。その平和を守るために、私ができることは小さなことかもしれませんが、それでも、今回学んだことを家族や友人に伝えること、学校で発表すること、日々の生活で人を思いやる行動を心がけることは、確かに私にもできる第一歩です。そしてこれからも学び続け、平和の大切さを忘れずに生きていきたいと思います。

今回の広島派遣で体験したことは、一生忘れることはないと思います。原爆ドームの姿、資料館で見た遺品、被爆者の証言、式典での祈りとデモの声、それらすべてが私の心に刻まれました。当たり前のように家族と過ごし、友だちと笑い合える日常がどれほど貴重なものかを実感した今、私はその「当たり前」を守るために自分にできることを積み重ねていきたいと思います。そして、平和の尊さを語り継ぎ、未来へつなげていくことを自分の誓いとしします。

『伝えたい』

広島での三日間は、「戦争の悲惨さ」「戦争に対する怒り」「平和の尊さ」「命の重み」を深く肌で感じる三日間となりました。

初日は、平和記念公園に行きました。初めて原爆ドームを目の当たりにして、被爆しボロボロになった姿で今もなお、その場所に佇んでいる様子に、「二度と戦争を繰り返してはいけない」「戦争の事実を忘れてはいけない」、そんなメッセージをドームが無言で伝えているように感じました。教科書などで何度も見た景色ではありませんでしたが、実際に見たことで建物にも思いが宿っているのだと感じました。その後、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館を見学しました。館内の壁一面に死没者の方々の名前が彫られており、たった一発の爆弾がこんなにも多くの人々の人生を、未来を奪ったのかと思うと悲しみを通り越して怒りがこみ上げてきました。

二日目は平和記念式典に参列しました。沢山の外国の方も参列していました。黙祷の一分間で僕は、八十年前の八月六日にここで起こった事実を目を背けず、忘れず、考え続け、平和を祈り続けよう、と決意しました。式典の後に、全校生徒で一羽一羽祈りを込めて折った千羽鶴を奉納しました。その空間は平和への思いで溢れており、こんなに平和を願う人がいるのに何故核兵器はなくなるのだろうかという疑問が湧いてきました。その後、平和記念公園に来ていた広島の高校の先生にインタビューをすることが出来ました。その先生は、被爆者の経験や思いをつなぐ手段として「歌」があると教えてくださいました。そして被爆80年プロジェクトのテーマ曲であるポルノグラフィティの「言伝-ことづて-」を教えてくださいました。その日の夜、僕はその日の出来事を振り返りながら「言伝-ことづて-」を聴き、歌詞に心打たれました。特に心に残ったフレーズが二か所あります。一つ目は「『明日が来る』ことがいつも嬉しいと隣の誰かと言い合える世界でありますように」です。僕は正直、これは当たり前のことなのでは。と思ったのですが、それは僕が今平和を感じているからなのだと理解しました。世界に目を向けてみたら、戦争をしている国があり、そこでは今この瞬間にも死の恐怖に怯えている人がいるのです。今すぐ戦争をやめて平和が訪れて欲しいと強く思いました。二つ目は「私たちの胸に預かっているもの 未来への言伝 たとえ小さな声だとしても 決して無力じゃないの」です。これを聴いて僕は勇気づけられました。ここでの体験をちゃんとつないでいけるのか心配でしたが、たとえ小さな声でも核廃絶にむけて平和への想いを発信し続けていくことが大切なのだと思います。



二日目の午後には平和学習の集いに参加しました。そこで被爆体験証言者の河野キヨ美さんのお話を聞きました。そのお話の中に耳を塞ぎたくなるようなことがありました。「眼球がゼリー状に流れ、破れた腹から内臓が出てきて、、、」そんなホラーゲームでしかありえないような状況を想像して僕は鳥肌が立ちました。河野さんはこんなことも言っていました。「世界情勢は不安定ですが、核廃絶と平和への願いを若い人に訴えたい。それがあの夏の日を生き残った者の責務だ。」と。戦争は生き残っても地獄です。被爆の後遺症を抱えながら生きていくのは僕には想像もできない程の苦しみがあったと思います。そして語り継ぐ為には、二度と思い出したくないような記憶を思い出して伝えなければなりません。河野さんがそこまでして訴えてくださった話を、僕は戦争を知らない世代の一人として心に刻みました。河野さんが渡してくれたバトンをしっかりとつなげていく努力をしたいと思います。

平和学習の後半はグループディスカッションをしました。日本全国から集まった派遣団員との交流の場です。そこで広島以外でも戦争で辛い体験をした人が大勢いることを知りました。

最終日に訪れた平和記念資料館では写真や絵、遺品が展示されていました。ビリビリに破れた洋服、人々が苦しみもがいている写真や絵、愛する人への大切な手紙。それらを見て、持ち主の無念の声が聞こえてくるような気がして僕は息が苦しくなりました。初日の原爆ドームを見た時と似たような感覚でした。戦争を風化させないよう、戦争の証拠として残っている物だと思いました。

この三日間、戦争の真実を見て聞いて体験しました。そして今までに感じたことのないような怒り悲しみ憤りなど負の気持ちで一杯になりました。同じ過ちを繰り返さない為にもどうしたら良いのか。全人類が「戦争をしてはいけない」と考える事なのではないかと僕は考えます。「戦争をしてはいけない」と考える人を一人でも増やしたい。今後のリレー講座や派遣報告会で今回学んだ事を派遣中学生の仲間と共に精一杯伝えていきます。

『One Voice ～世代を越えた平和への思い～』

私がこの広島派遣に参加しようと思った理由は、中学一年生の時に「はだしのゲン」という漫画を読んで、本当にこんなことが日本で起きたのかと疑ってしまうほど衝撃を受けたからです。誰が原爆を発明したのか、なぜ原爆が広島と長崎に落とされたのかなど疑問に思い、参加しました。



一日目に訪れた原爆ドームでは、TVなどで見る時とは違う迫力を感じました。中にはがれきが多くあり、鉄骨が今にも落ちそうになっているところを見て、原爆がどれほど恐ろしいものなのかを実感しました。また、平和記念資料館では多くの写真や絵、当時の遺品などを見ました。正直に言ってしまうと目を背けたくなくなってしまふほどのものでした。全身にやけどを負っている人の写真、皮膚が垂れ下がり、水を求めて歩く絵、放射線に侵され、黒い斑点が浮き出る人の写真、当時の人が着ていた衣服、がれきなどを見ました。あの衝撃は忘れられません。

二日目は平和記念式典に参加し、印象に残ったことは平和への誓いです。小学六年生の方が平和を創り上げていくことを誓うというものです。「たとえ一つの声でも、学んだ事実に思いを込めて伝えれば、変化をもたらすことができるはずです」これは平和への誓いの話の一文です。この言葉は私たちに向けて言っていると思いました。悲しい、怖いと感じたことをそのまま伝えるだけではなく、調べて学び、胸に強く残った思いを言葉で伝えあうことで少しの人でも変えられる可能性が高まるのだとよくわかりました。

式典後にはインタビューや平和学習の集いに参加しました。インタビューでは、各世代の方の意見を聞かせていただきました。その中で「いつもの日常が一瞬で壊されてしまうから怖い」という意見や、逆に「自分と同じで怖い・悲しいという思いを持った人がたくさんいて安心した」という意見も出ました。平和や原爆への想いの中にも、一人一人の意見が全く違う視点があることを強く感じました。平和学習の集いでは、河野キヨ美さんが十四歳の時に被爆した話をしてくれました。写真や絵ではわからない細部のことがその話を通してよくわかりました。「生まれて初めて多くの残酷な屍や怪我人を見て、私の心は麻痺し、何を見ても何も感じなくなりました」これは実際に河野さんが私たちにしてくれた話の一部です。私は平和の時代に生まれることができ、心が麻痺するほどの凄惨なことなんて今まで想像もしませんでした。その言

葉が残り、胸が痛くなりました。グループディスカッションでは、『平和でない状態とそれの解決策』について話し合った時のことが強く心に残っています。戦争について知ってもらうために教育の過程でもっと触れるべきという意見や、劇などで自分たちから多くの人に伝えるべきという意見も出ました。原爆について詳しく知った理由を聞いた時に、私は「はだしのゲン」で知りましたが、TVで詳しく知った人や、火垂るの墓というアニメ映画で詳しく知った人もいました。私は日本の各地から原爆について詳しく知った理由も年齢も違う人たちが、平和について真剣に話し合えていることが純粹にうれしいと感じました。

三日目の多聞院では、鐘楼が被爆した時のままの姿で保存され、爆風の影響でぼろぼろになっていました。最後に本川小学校に行きました。「多くの人々の悲しみと願いが秘められたこの平和資料館から、平和の大切さと人命の尊さを学んでいただきたいと思います」これは本川小学校について書いてある看板の一部です。見学してみて、平和の大切さがより一層深まりました。爆風の影響で壁や天井がぼろぼろ、被爆前と後の写真、そこから復興するまでの写真を見て、多くの人々の苦勞と、平和の大切さが身にしみてわかりました。

私がこの三日間を通して感じたことは、原爆は本当に恐ろしいことで二度とこの悲劇を起こしてはならないということです。単純で当たり前のことです。しかし、世界では各地で戦争が起こり苦しむ人たちもいれば、日本でも政治家の一部の人は、日本も核抑止をするべきだという人もいます。私は核抑止に反対です。再び原爆の被害を受ける人がいなくなるように、新しい時代を担う私たちが核をなくすべきだと、戦争をやめるべきだと声を上げていくことが必要だと強く感じました。そして、そのことを後世に伝えていくことが平和につながると思いました。また、先のことだけでなく今のことに目を向けると、アメリカでは、核を落としたことで戦争が早く終わったと解釈している方がいますが、その一発で多くの方の命が奪われているのにそれを正当化してはいけないと思います。そして、そのことを日本やアメリカだけでなく、世界に発信しなければいけないと思います。

『大切な人や時を考えた日』

広島に到着して最初に訪れたのは平和記念公園でした。原爆の恐ろしさや被爆者の体験を目の当たりにし、言葉を失うような気持ちになりました。原爆死没者慰霊碑の前で手を合わせたとき、静かな空気に包まれ、戦争で犠牲になった多くの人々の存在を改めて強く感じました。慰霊碑の碑文に刻まれた「安らかに眠って下さい 過ちは 繰返しませぬから」という言葉は、広島の人々の深い願い を象徴しており、私の心にも重く響きました。



また、「原爆で亡くなった方々の思いを忘れてはいけない」と思いその感情から、戦争は遠い過去の出来事ではなく、今の自分たちがしっかりと学び、未来に伝えていくべきことなのだ実感しました。特に「原爆は人間の尊厳を奪うものであり、二度と繰り返してはならない」という言葉が印象に残り、自分自身の平和に対する意識を改めて問い直すきっかけとなりました。

平和記念資料館では、被爆直後の町の様子や人々の苦しみが写真や映像を通して詳しく展示されていました。焼けただれた衣服や当時の持ち物、被爆者の証言などを見ていると、教科書で学んできたこと以上の現実感が迫ってきました。特に、当時まだ幼い子どもたちが犠牲になった話は胸が痛み、涙をこらえることができませんでした。

被爆直後の町の様子は、爆心地付近では建物が一瞬で崩れ落ち、多くの人々が熱線や放射線によって命を落としました。展示されていた写真や衣服は、その凄まじさを物語っており、「これが実際に人間に起こったことなのか」と信じられないほどでした。資料館の中で「三秒で命を奪われた子どもたち」という説明を読んだとき、自分と同じくらいの年齢の子が何の罪もなく命を奪われたことに強い衝撃を受けました。

被爆の熱と放射線の影響は、原爆投下直後の高温は約三千度にも達し、近くにいた人々は一瞬で焼かれてしまったと知りました。また、被爆からしばらくして亡くなった人も多く、その理由は放射線による被害だったことも学びました。髪が抜け落ちたり、高熱や下痢に苦しんだ人々の体験談は、放射線の恐ろしさを具体的に伝えていました。放射線は目に見えず、においもしないため、被爆者自身も気づかないまま命を奪われてしまうことが多かったと聞き、人間の力ではどうにもならない残酷さを感じました。

資料館の見学の後、実際に被爆を体験された方のお話を聞く機会がありました。その方は当時まだ子どもで、突然の閃光と爆風に襲われ、気がついたら町中が瓦礫と炎に包まれていたそうです。「助けてという声があちこちから聞こえてきても、自分自身が動けず何もできなかった」と話されていたのが忘れられません。証言の一つ一つが胸に刺さり、戦争がいかに多くの人の人生を奪い、心に消えない傷を残すのかを考えさせられました。

また、その方は「自分が語り続けることで少しでも戦争の悲惨さを伝え、平和な社会の実現につなげたい」とおっしゃっていました。その姿を見て、戦争体験を知らない私たちがしっかりと学び、次の世代へ伝えていくことの大切さを強く感じました。

私はこの三日間学び感じたことで、感情がすごく複雑な気持ちになりました。戦争や原爆では人の命、大切な人や物を一瞬にして奪ってしまうことの恐ろしさを想像しました。

被爆体験講話ではたくさんの方が質問をしていて「私もすればよかった」と少し後悔しています。ですが、質問してもらった応えを活かしてもっとたくさんの人に戦争の恐ろしさ、平和の大切さ、原爆の影響を教えて自分ももっと深く掘り進めて理解していきたいです。

平和は大切なことでどれだけ願っても必ずしも平和が絶対くるとは言えないけど、争いを起こさないための工夫や平和について考えることは誰にでもできます。今できることを一生懸命に考え、大切な人・大好きな人とずっと一緒に生きていきたい、命の大切さ、命の尊さが知れた大切な経験ができた三日間でした。

この研修を通して、平和はただ「戦争がない状態」を指すのではなく、人々が安心して生活できること、差別や争いのない社会を築くことだと学びました。戦争や原爆の悲惨さを学んだ今、私にできることは小さいかもしれませんが、身近な人を大切に、争いではなく対話を大事にすることだと思います。そして、この体験を忘れずに、友人や家族、後輩にも伝えていくことで、少しでも平和な未来に貢献できるのではないかと考えました。

最後に、今回広島で学んだことを通して「二度と同じ過ちを繰り返さない」という誓いを心に刻みました。1945年に起きた出来事を風化させず、自分自身の言葉で伝えていくこと。それが私に与えられた責任であり、広島を訪れた意味だと思います。

同じ我孫子市の他校生徒さんたちや我孫子市の職員さん方をはじめ、市長さんたちと平和式典に参列できて、貴重な体験ができたことに感謝しています。

感謝を忘れず、この平和がいつまでも続くようにしたいです

『忘れてはいけない記憶』

一日目広島につき、まずは原爆ドームを見学しました。私は原爆ドームについて学校の授業などで少し触れ、写真や動画でしか見たことが無く、本当に存在するのか、本当にあったことなのかとずっと思っていました。ですが、実際に実物を見ると私は、「ここ広島に原爆が落とされた」・「本当にあった出来事だった」と実感しました。



平和記念公園では、前日にもかかわらず、明日に行われる平和記念式典のリハーサルをしていました。その中では小学6年生の2人が平和への誓いの練習をしていて、その行っている姿や言葉ひとつひとつにとっても感心を受けました。そして平和記念公園にはたくさんの方がいて、明日行われる平和記念式典は私が思っている以上にとてもすごい式典だと知りました。

平和記念資料館では、とてもたくさんの写真や絵が展示されていました。顔や体に火傷を負った人、焼け跡の遺体、川面に浮かぶたくさんの死体の写真。他にも、顔や舌に死の斑点が出ている人、放射線によって頭髪が抜け始める子供の写真。そして今も後遺症に苦しむ人々の写真も展示されていました。私は平和記念資料館を見学している中でも「ノーモア・ヒロシマ」という言葉がとても印象に残りました。「ノーモア・ヒロシマ」とは被爆資料や遺品、証言などを通じて、世界の人々に核兵器の恐怖や非人道性を伝え、訴えることです。私はこの言葉をきき、我孫子市に帰ったら絶対にこの言葉をたくさんの人に知ってもらいたいと思いました。

平和記念式典では、いろいろな方にお話をきいたり、黙とうを行ったりしました。私は式典が行われているとき、原爆がおとされた日のことを心の中で思いながら出席させていただきました。その中でも私は子ども代表の平和への誓いの言葉がとても心に響きました。「One voice.」たとえ一つの声でも、学んだ事実思いを込めて伝えれば、変化をもたらすことが出来るはず。私はこの言葉をきき、これからは今以上にたくさんの場所で意見を出していきたいと思いました。平和記念式典の後、3人の方にインタビューをさせていただきました。インタビューさせていただいた方たちに全員に同じ質問をすると、皆それぞれ違う意見がでてきました。私はそれを聞いて、人によっては原爆や平和への感じ方は全然違うのだとわかりました。

平和学習の集いでは、実際に被爆体験をした河野さんのお話を聞きました。当時 14 歳の河野さんは爆心地から 35 km の自宅で被爆し、原爆が投下された翌日に 2 人の姉を探しに市内に行きました。その時、いたるところに死体があるのを見て「感情が麻痺した」とおっしゃっていて、私が想像している何倍も怖かった出来事だったということを知ることが出来ました。私は、河野さんのお話をきいて、平和記念資料館などではわからないことを知ったり、改めて絶対に忘れてはならないことだと思いました。

三日目は、もう一度平和記念資料館に行きました。一日目に見たものは全て同じなのに、原爆などいろいろなことを学んでから行くと、全く違う感じ方でした。なので、もっと原爆について調べて、詳しくなったらまた平和記念資料館に行きたいと思いました。

本川小学校平和資料館では、原爆が落とされたときにあった建物の一部がまだ残っていてとても驚きました。この小学校の壁は鉄筋コンクリートでした。それでも鉄筋コンクリートの壁は、原爆に耐えることができなく、原爆の威力はとても強いのだと思いました。また、被爆後の教室の写真や当時の物がそのまま残っていて見ることが出来ました。

原爆が落とされた後、この小学校の校庭が死体の火葬場として使われていたことを知り、今では考えられない光景を想像すると、少し怖くなりました。

私はこの広島派遣を通して、原爆の怖さや命の重さ・尊さを知れました。また、実際に起こった場所でしかわからないこと・実際に被爆された方にしかわからない思いを知れたりなどたくさんの貴重な経験をさせていただきました。これから私は、いつ何が起き、当たり前がなくなるのかわからないので、一日一日をもっと大切に生きていきたいと思います。そして今回学んだことを、自分から積極的に口に出し、このことを忘れられないよう、たくさんの人に知ってもらいたいです。

『未来につなぐ平和の大切さ』

私はこの夏、広島派遣団の一員として、平和記念公園や原爆資料館を訪れ、戦争と平和について深く考える貴重な経験をしました。広島を訪れるのは初めてで、テレビや教科書でしか知らなかった原子爆弾の恐ろしさを、実際にその場所に立つて感じることで、改めて平和の大切さを強く心に刻むことができました。



平和記念資料館では、原子爆弾によって亡くなった多くの人々の写真や遺品が展示されていました。焼けただれた衣服、小さくなったお弁当箱、時計が爆発の時間で止まっている様子など、どれも目をそらしたくなるようなものばかりでした。中でも、同じくらいの年の子どもたちが原子爆弾で命を落とした話を読んだとき、涙が出そうになりました。「もし自分だったら」と考えると、とても胸が苦しくなりました。

原爆ドームの前に立ったとき、私は言葉を失いました。あの建物が爆風に耐えて今も残っていることが奇跡のように思えました。同時に、それは戦争の恐ろしさと悲しみを今に伝えてくれる「無言の語り部」だと感じました。私達が決して過去を忘れてはいけないという強いメッセージがそこから伝わってきました。

もう一つ心に残ったのは、被爆体験を語ってくださった方のお話です。戦争での苦しみや、戦後のつらい生活のことを、涙ながらに語ってくださいました。その姿を見て、私は戦争が終わっても、被害にあった人たちの苦しみがずっと続いていることを知りました。そして、今こうして平和な時代に生きている自分たちが、その思いを受け継ぎ、二度と同じ悲劇を起こさないよう努力しなければと思いました。

今回の派遣では、全国から来た中学生とも交流することができました。それぞれの地域での平和学習の取り組みや、自分たちの考えを聞くことで、自分がどれだけ平和について知らなかったかに気付かされました。平和は当たり前ではなく、みんなで努力して守っていくものなのだとことを改めて感じました。

広島で学んだことを、私は自分の学校や家族、友達にも伝えていきたいです。原子爆弾の恐ろしさ、戦争のむごさ、そして平和の尊さを、言葉にして伝えていくことが、自分にできる第一歩だと思います。また、日々の生活の中で、争いを避けること、人の気持ちを思いやることなど、小さなことから平和を築く努力をしていきたいと思いません。

平和を守るために自分ができることは何かと考えたとき、私はまず「無関心にならないこと」が大切だと感じました。戦争や原子爆弾の話はどこか遠い過去のことのようには思えるかもしれませんが、しかし、それを「自分には関係ない」と思ってしまうと、悲しい歴史は忘れられ、同じことがくり返されるかもしれません。だからこそ、広島で見たこと、聞いたこと、感じたことを心にとどめ、自分の中で考え続けることが大切だと思います。

また、被爆した方のお話を聞いた時、「苦しい記憶を語ることは、簡単なことではない」ということに気付かされました。話すたびに当時のことを思い出すのは、きつとつらいことだと思います。それでも、「未来のために伝えたい」と語ってくださる姿に、私は深く感動しました。その思いを無駄にしないように、私たちが受け取った言葉や願いを、次の世代へとつなげていく責任があるのだと感じました。

広島での学びは、単なる知識ではなく、自分自身の考え方や行動を見つめ直す大きなきっかけになりました。今までの自分が、どれだけ平和について「当たり前」と思っていたのかを反省すると同時に、これからは、「自分も平和を築く一員なのだ」という意識を持って生きていきたいと思います。

『受け継いでいくリレー』

僕はこの夏、広島派遣団の一員として広島を訪れ、原子爆弾の歴史や被爆者の方々の思いに直接触れることができました。過去に参加した先輩が言っていたとおり、インターネットや教科書で見て感じたこととは全く異なり、現地では言葉では言い表せないほど深い思いを聞き、見て感じることができました。



広島に到着してまず訪れたのは、原爆ドームでした。ドームは爆心地のすぐ近くにあり、爆風や熱線の衝撃があったのにもかかわらず、奇跡的に一部が崩れず残っていました。建物の鉄骨がむき出しになり、崩れかけていたその姿は、当時ここで起こった悲劇を、訴えかけてくるようでした。警備員の方がたくさんいたのもあってか、少し緊張してしまいました。

次に訪れた平和記念資料館では、原子爆弾によって命を奪われた人々の遺品や写真、当時の状況を記した資料が数多く展示されていました。中でも一番心に残ったのは、被爆者の方々が描いてくださった絵です。その内容はまさに目を背けたくなるほど悲惨な光景でした。全身が真っ赤で、肌が焼けただれた人が歩いている絵や、橋の上や川で何百人もの人の命が失われている絵などでした。僕は、地獄のような現実、言葉を失い、ただ寒気を感じるばかりでした。

二日目はまず、平和記念式典に参列しました。式典には、内閣総理大臣も参列し、原爆投下から八十年という節目の年ということもあり、式典全体を厳粛な空気が包み被爆者や、現地の人たちの悲しい思いがよく伝わってきました。日本人だけでなく、外国からも参列している人もとても多く、世界にこんなにも、核がなくなってほしいという僕たちと同じ思いを持っている人がいることを知り、大きな希望を感じました。

平和記念式典が終わり、次に僕たちは平和記念公園内でのインタビューをしました。僕は愛知から訪れた五十代の日本人の方にインタビューをしました。写真なども撮らせてもらい、とてもおだやかで、やさしく接してくれる人でしたが、インタビューをいざ始めると、顔が急に真剣になり、とても熱く原子爆弾について語ってくれました。僕たちに対しても、「頑張ってもらいたい」などと言ってくれて、とても力になりました。

次に平和学習の集いに参加させていただきました。最初に、広島原爆のボランティアさん「We' re Peace- Loving Citizens」の人たちが原子爆弾について丁寧に教えてくれました。次に全国から集まった小中高生たちとディスカッションをしました。男女6、7人程度でグループを作り、「地元が第二次世界大戦中にどのような被害が出たかについて」と、「平和について」の二つを話し合いました。そこで僕は、平和に大切なのは話し合いだと思いました。なぜなら人を見た目で判断せず、まずは同じ人間として話し合ったりすることが平和への一歩だと思ったからです。

次に被爆者の方の話をきかせてもらいました。その内容は僕の心を重くさせる悲惨なものでした。その被爆者の方は、爆心地から約35キロメートルはなれた田舎に住んでいたと言います。家にいたら急にドーンと爆発音と共に煙が広島の方から上がっていたそうです。当時14才だったその方は母親と共に広島に車でいくと広島は更地になっていたそうです。広島を歩いていると、激しい熱線に焼かれた人間は肌は赤黒くただれ、内臓はとび出ているそうです。水を求めて川に入った人は全員命を落としたと話してくださいました。

被爆者は、放射能障害や怪我で数日で死んでしまう人が多く、その数日間の苦しみは、想像するのもおぞましいです。そして思い出したくもない事を私たちのために話してくださり、感謝の気持ちと、二度と繰り返さないようにこの事実を伝えていこうという気持ちでいっぱいになりました。

三日目になり僕たちは多聞院に向かいました。多聞院では現地の人の話は聞けませんでした。被爆地の砂を入れて再鑄された平和の鐘を鳴らす体験ができました。

最後に本川小学校平和資料館に行きました。本川小学校では、被爆前の物がたくさん残っていました。そして僕が初めて見る「三八式歩兵銃」というものがありました。他にも兵士がよくかぶるようなヘルメットなどもあり、こういう物で実際に戦争が行われていたと考えると恐ろしさを感じました。

僕はこの三日間でたくさんの事を知り、学び、見て感じました。これからもリレー講座や発表などたくさんありますが、広島で感じたことを忘れず、当たり前のように感謝しながら生活したいです。

『自分の思う幸せとは』

僕は8月5日から7日の三日間広島派遣に参加しました。今回僕が広島派遣に参加しようと思ったきっかけは二つあります。まず一つ目は僕の曾祖父が東京大空襲の犠牲者でしたので幼少の頃から戦争の出来事に関心がありました。加えて今年は「戦後80年、原爆が落とされて80周年」という節目の年でもあったのでより関心が強まりました。二つ目は、以前先輩方の広島派遣の発表で実際に体験したことや学んだことを聞いて自分も実際に参加して被爆者の生の声を聞いてみようと思い参加を決意しました。



僕にとって、広島派遣に参加するということは何か大きな意味があり、世界で一つしかない被爆国だからこそ分かる核兵器の恐ろしさなどを学んで家族や地域の人と共有しあう必要があると思いました。そこで、この三日間の広島派遣で感じたことや学んだことを紹介します。

まず一日目は広島に着いて平和記念公園を訪れました。僕は初めての広島に興奮して胸が一杯になりました。しかし、平和記念公園内にある原爆ドームを見たときあまりの惨状に言葉を失いました。写真で見た時よりも鮮明に建物の様子が分かり、焼け焦げた外壁や溶けて鉄骨だけになった天井、ガラスもなくただの壁となった建物は写真では決して分かることではありません。この地で80年前に原子爆弾が落とされたことを思うと恐ろしくてたまりませんでした。

その後、平和記念資料館を見学しました。そこでは被爆して亡くなった方々の焦げてボロボロになった衣服や手紙、被爆して苦しんで周りから差別されて辛い思いをされている方々の写真を見て原子爆弾は本当に悲惨でこの地球上にあってはならないと強く感じました。一日目の最後に国立広島原爆死没者追悼平和祈念館を見学しました。ここでは死没者を追悼する空間や亡くなった方々の写真や当時の声を映像で紹介されていました。原爆の恐ろしさを考えながら一日目を終えました。

二日目は平和記念式典に参加しました。その中での平和宣言や平和への誓い、特に「平和な世界に向け強く決意し、行動を示す年にしなければなりません。」という市議会議長の言葉がとても印象に残りました。また平和の鐘の音の響き、歌声と吹奏楽の迫力の演奏、警備やスタッフの細かい気配りなどテレビやネットでは分からなかつ

たことがたくさんありました。その後、僕たちはグループに分かれて平和記念式典に参列された方にインタビューをしました。広島では「戦争は絶対に良くない。」「原爆は二度と落としてはいけない。」という意見がとても多かったです。また海外の留学生から僕たちはインタビューをされ、僕たちが小学生の時に行われたリレー講座についてや戦争をどう次世代に伝えているのかなど質問を受けていると、海外の方々も原爆の恐ろしさや世界の平和についてとても関心を持っていることに驚きました。

その後「第一回全国平和学習の集い」では核兵器の脅威や悲惨さを知ったうえで、広島で被爆された河野さんの体験を聞きました。グループディスカッションでは全国から集まった人たちと色々な意見を交わし、その中で様々な考えもありたとえ自分と違う考えだとしても否定せず新しい自分の考えとして深めていくことが大切だと学びました。平和の尊さと対話の大切さを感じながら二日目を終えました。

最終日は多聞院という寺院に向かいました。多聞院は原爆の被害に遭いましたが建物は全壊を免れました。鐘楼は天井の木材が割れ、石造りの多層塔の一番上の石が斜めに曲がっていて当時の被害状況を間近で感じ取り、しっかりと目に焼き付けてきました。それから平和記念資料館を再び訪れました。一日目に訪れた時より絵や写真など細かいところを見たり、広島の復興など違う視点で見学することが出来ました。最後に本川小学校を見学しました。爆心地からわずか410mの場所にあり、その時屋外にいた10人の教師と約400人の児童は全員犠牲となり鉄筋コンクリート造りの屋内にいた教師と児童のわずか2人だけが助かったそうです。実際に焼け焦げた建物の惨状をみて改めて核兵器に強い恐怖感を抱きました。

僕が広島派遣に参加して学んだことは、普段自分たちが元気に生活している中にこそ幸せがあるということです。今までは幸せとは単に戦争が無い世界だと思っていました。しかし、それは幸せの一部にすぎません。本当の幸せとは、毎日僕たちが元気に生きていること、学校へ行って勉強出来る環境があること、友達と楽しく遊べること、家族と話せることなど身の回りにあふれている普段の生活そのものだと知りました。

今回参加したことで当時の広島の様子を知るとともに幸せとは何かを改めて考え直すことができました。

「ワンボイス」たとえ一人の意見でも、「ネバーギブアップ」決してあきらめなければ結果は必ず訪れると思います。この気持ちを決して忘れずリレー講座などで沢山のの人に核兵器の恐ろしさや平和の尊さと対話の大切さを伝えていこうと思います。

『派遣学習3日間の感想』

自分は、今回の広島派遣学習の3日間で経験したこと、印象に残ったことが沢山ありました。

まず1日目は主に平和記念公園、平和記念資料館の見学がありました。広島駅から広電に乗り、原爆ドーム前駅に着くと写真や動画などでは沢山見てきた原爆ドームがもう目の前にありました。実際に近くで見ると、鉄骨が剥き出しになっていたり、所々崩れ落ちていたり写真などで見るのとは違い、原爆がどれ程の影響を与えたのかが本当によく伝わりました。

平和記念資料館の見学では、最初に思ったのが、外国人が非常に多いことです。日本人より多かったように思いました。そして資料館の中はとても広くて展示もたくさんありました。原爆投下時の当時の街の様子や、人々がどんな状況下に置かれていたかなどがとてもよく伝わり、これを見られただけでもここに来て本当に貴重な体験ができたと思いました。

2日目では平和記念式典、平和学習の集いがありました。まず朝8時から平和記念式典があり、この式典で特に印象に残ったのが2つあり、1つ目が子供代表の平和への誓いです。自分よりも年下の子があんなに大勢の前で堂々と喋れるのが凄かったですし、何より誓の中での『One voice』という言葉が印象に残りました。たとえ一つの声でも思いを込めて伝えれば変化をもたらすことができる。この言葉にとっても自分は感動しました。2つ目は、直接式典のことではないですが、式典中に聞こえていたデモ隊の声です。自分はデモ隊の存在をあまり知らなかったもので、最初はなんの事だろうと思っていました。ですが後から知り、これまた動画などでは知ることのできないことを知ることが出来ました。

式典が終わり、少し経ってからグループで参列者へのインタビューを行いました。自分のグループがインタビューした人の中には外国人もいて、この式典には世界中から人が来ているのを改めて感じました。それから少し時間が経ち、広島市役所で平和学習の集いがありました。この平和学習の集いでは原爆被害の概要説明会、被爆体験証言、グループディスカッションがありました。まず概要説明では原爆の作られた経緯や、死亡者などの詳細な話を聞きました。そして今では数少ない被爆者である河野さんの被爆体験を聞きました。話を聞くと当時どこに居たか、街はどんな状況だった



か、思い出すのも辛いだらうに河野さんは事細かく話してくださいました。自分は今までの人生で実際に被爆者のお話を聞いたことが無かったので本当に印象に残りましたし、最後の方は涙ながらに話している姿を見て、自分も少し目が潤んでしまいました。この話を聞いて改めて自分の経験したことを周りの人に伝えようと思いました。

そして、グループディスカッションでは話していた人の地元が第二次世界大戦中どんな被害を受けたか、平和でない状態や、その解決策はどんなものなのか、主にこの2つのテーマでグループディスカッションをしました。話をしていると、原爆のこと以外にも空襲などでたくさんの方が亡くなっていること、規模は小さいですが学校を平和なものにするためにどのような取り組みをしているかなどについて沢山話をすることが出来て、自分でも、もう少し考えたり調べたりしてみようと思いました。

そして最終日である3日目には、多聞院の見学、2回目の平和記念資料館の見学、本川小学校の見学を主にしました。まず多聞院の見学では、多聞院に置いてある、鐘の木の部分が原爆の影響で少し傾いているのを見て、こんな所まで原爆の影響があることを知りました。

2回目の資料館見学では、1回目では見られなかった所まで見る事が出来て、さらに当時のことを知ることが出来ました。そして最後の見学である本川小学校平和資料館の見学では、この学校の歴史やボロボロになった銃や、ヘルメット、焼け焦げた配電盤などを見ることが出来ました。そしてこの見学で特に印象に残ったのが、この本川小学校が有名な漫画の『はだしのゲン』に出てくる小学校のモデルになった場所だったことです。そうして本川小学校の見学も終え、この3日間の長いようで短かった派遣学習は終わりました。

この感想文に書いたこと以外にも、2000文字では書ききれない程の沢山の思い出や、経験がありました。そして自分はこの貴重な経験を、今後のリレー講座などで後世に語り継ごうと強く思いました。最後に、自分の後に行く後輩達も、沢山経験をして、原爆のことなどを風化させないように、しっかり語り継いで欲しいです。

『広島で学んだ、恐ろしさ』

私は、この広島派遣の3日間で、テレビのニュースや新聞などでは分からなかった戦争の恐ろしさや心でしか感じられないことを『体感』できました。



私が広島派遣に参加した理由は、担任の先生やテニス部顧問の先生からの強い勧めがあったことが一番の理由ですが、元々、私も広島や長崎に投下された原爆について興味があったため参加することを決めました。

私が3日間の広島派遣で学んできたことは、4つあります。

1つ目は、平和記念資料館の見学から学びました。

原爆投下の主な原因が1942年6月にアメリカで考えられたマンハッタン計画であり、広島に投下された原爆は「リトル・ボーイ」という名前で、長さ約3m、直径約0.7m、重さ約4tであったということを知りました。そして、私が想像できないほどの威力と大きさがあったということを知りました。そして、私が想像できないほどの驚きを覚えました。また、原爆は、投下された一瞬だけの被害ではなく原爆症のケロイドや胎内被爆をし知的障害が残り、周りから理解されず何年もの間苦しんできたという事実を様々な資料から学ぶことができ、とても心が締め付けられました。

2つ目は、多聞院・本川小学校・レストハウスの見学から学びました。

爆心地から1キロ以上離れていた多聞院では、石造層塔が傾いていた事、鐘を支える柱にヒビが入っているの見学しました。そして本川小学校の原爆投下後の学校の写真では窓が割れ吹き抜けになっている所やヒビが入っているところがありました。これらの事から爆風の威力の強さを想像することができ、言葉を失うほどの衝撃を覚えました。またレストハウスの地下にあった防空壕に行くと、こんなに薄暗く、狭い場所に長時間居続け、外で何が起こっているのか分からず攻撃が終わるまで隠れ続けなければいけなかったのは、ものすごく不安だったのだろうと思いました。

3つ目は、平和記念式典から学びました。

私は、1分間の黙祷の時間で被爆して亡くなってしまった人に「安らかに眠ってほしい」と思うと同時に、今後、この広島・長崎に投下された原子爆弾のような悲劇を私達は決して忘れてはいけないし、二度と繰り返してはいけないと強く心に誓いました。また、子供代表の言葉にあった「One voice。たとえ一つの声でも、学ん

だ事実に思いを込めて伝えれば、変化をもたらすことができるはず。」という言葉に心を打たれました。そして、たとえ周りが平和の大切さや被害の大きさを語らなかつたとしても、私だけは自信を持って身近なところから発信していこうと思いました。

4つ目は被爆体験者の河野さんの話や他県から来た広島派遣中学生とのディスカッションから学びました。

私は、この広島派遣に参加するまでは、第2次世界大戦の大きな被害は原爆の投下によるものだと思っていました。しかし、ディスカッションをしていくうちに東京大空襲などの空襲も原爆に近い被害がもたらされているということが分かりました。

河野さんからの話では、様々な貴重な話を聞くことができました。特に心に残っていることは、「原爆の投下は一瞬の出来事で、次の日に姉の無事を確かめるために赤十字病院に行くと入り口に子供の死体が山積みになっていたり、道路には赤や茶色になった死体が転がっていたり、水がほしいと訴える人がいて恐怖を感じるほどだった。」という話です。

それは、私にとって本当にあったことなのかと信じられないほど衝撃的でした。そして、私は想像するだけで怖くなってしまいました。

また、他にも、広島を中心部では、お米のみが入っているおかゆで、郊外（農村）では、おかゆにそれぞれの時期に取れる野菜をすりおろして混ぜて食べていたという戦時中の食べ物についての話も印象的でした。

最後に、この広島派遣の3日間は、我孫子市内および他県の他校の生徒と知り合うこともでき、ただ時系列で学ぶだけでなく心で感じられたことや私が知らなかった新たな学びがありました。学校生活だけでは得られない、戦争について深く考える良い機会となりました。次は学んだことを我孫子市の小学校でリレー講座のアシスタントをする時に活かして、戦争について学んだことを伝えていきたいと思います。

『平和のために』

平和とは何か、そして平和のために私たちに何ができるのか。その答えを知るために、私は広島派遣に参加することを希望しました。派遣に行く前は、原爆の被害や被爆者の思いについて深く知りませんでした。広島での学びを通して、多くのことを感じ、考え、知ることができました。



1日目は原爆ドームや平和記念資料館の見学をしました。最初に原爆ドームを目にしたとき、私は大変な衝撃を受けました。窓ガラスは割れ、壁は崩れてはがれ落ち、がれきも当時のまま残されていました。その姿から戦争を決して風化させず、二度と繰り返さないという被爆者の方々の強い思いを感じ取りました。平和記念資料館では、被爆当時の被害の実態について詳しく知ることができました。原爆の被害は爆発や爆風だけでなく、放射線による白血病や重度の障害など「原爆症」も含まれます。当時は原爆症への理解が少なく、「病気が移る」と言われ周囲から避けられ、仕事を休めば「ぶらぶら病」と呼ばれることもありました。それでも被爆者の日記には、懸命に生きようとする日々が記されていました。原爆症そのものがとても苦しいはずなのに、周囲から理解されず大変な生活を強いられていた被爆者の姿を思うと、私は胸が締め付けられる思いがしました。

2日目は、平和祈念式に参加しました。そこには国内だけでなく国外からも多くの人が参列していて、日本に原子爆弾が落とされたという悲惨な歴史が、国際的にも重く受けとめられていることを実感しました。また、国外からこの式典に参加する「平和への行動力」にも私は驚かされました。平和祈念式で私が最も心に残ったのは、子ども代表による平和への誓いの一文です。「周りの人たちのために、ほんの少し行動することが、いずれ世界の平和につながるのではないのでしょうか。」この言葉を聞くまでは、平和のために私たち中学生に何が出来るのだろうと考えていました。しかし、一人ひとりの思いやりや行動の積み重ねこそが、世界の平和へとつながっていくのだと初めて知ることができました。

平和祈念式終了後、私たちは「平和学習の集い」に参加し、被爆体験証言を聞いたり、グループディスカッションを行いました。被爆体験者の証言では、14歳のころに被爆した河野さんが、被爆直後の広島の大惨劇についてわかりやすく丁寧に話してく

ださいました。その話を聞き、今の自分たちの身の周りにある「当たり前」が、どれほど貴重で大切なものであるかを改めて実感する機会となりました。グループディスカッションでは、他県から来た中学生五人と一緒に、「どうすれば平和な世界になるか」について意見交換をしました。「いじめやけんかといった身近な問題から解決していくべきだ」という意見もあれば、「人の良いところをたくさん見つけ、一人ひとりが仲良くなるために行動していくことが大切だ」という考えもあり、同じテーマで話し合っているにもかかわらず、意見が大きく異なることにとても驚きました。しかし、どの意見からも「平和を本気で考えている」という気持ちが伝わり学ぶことばかりでした。私にとってこの2日目は、普段の何気ない日常の大切さを改めて実感するとともに、世界の平和のために私たちに何ができるかを学び、気付くことが出来た一日でした。

3日目、私たちは多聞院の見学に行きました。そこには被爆した当時のまま残されている鐘がありました。鐘を鳴らしてみると、被爆して崩れそうな見た目とは裏腹に、とても綺麗で力強い音が鳴りました。その音からは、被爆者の方々の「絶対に生き延びてやる」という力強い想いを感じました。多聞院の見学の後、1日目に続き2度目の平和記念資料館を見学し、さらに本川小学校平和資料館を訪れました。2日間の学びを踏まえて再び平和記念資料館を見学すると、八十年前の出来事でも一つ一つが自分自身のことのように感じられ、1日目に訪れた時とはまた違った思いが溢れてきました。本川小学校では、被爆当時の小学校の状況が写真とともに展示されていました。その中で特に目を引いたのは、被爆直後の広島市を再現した模型でした。そこに広がっていたのは、建物も人の営みも消え去った灰色の焼け野原でした。今では復興し、多くの人々が暮らしている広島市が、かつてあのような悲惨な姿だったことを改めて知り強い衝撃を受けました。

私はこの3日間を通して、平和の尊さや日常のありがたさを深く実感しました。広島で学んだことを周りに伝え、未来につなげていくことが私たちの役割だと思います。そして、一人ひとりが思いやりを持って行動することが平和への第一歩だと学びました。これからは私自身もその思いを大切にしながら、平和な社会づくりに貢献していきたいです。

『広島派遣で感じたこと』

僕は、3日間の広島派遣を通して戦争や原爆の恐ろしさを学び、改めて平和の尊さについて考えることができました。そして、様々なことを知り、感じることができました。そこで、僕がこの3日間ですべて印象に残ったことを4つ紹介します。



1つ目は、広島市が発展していたことです。1日目、広島駅に着いて外に出たとき、駅自体がとても大きく、たくさんのホテルやビル、そして様々な建物が広島に並んでいました。「75年間は草木も生えぬ」と言われていた広島。あんな悲惨なことがあった広島に草木が生えただけでなく、ここまで発展したのは、当時広島に住んでいた人達のおきらめない気持ちがあったからだということを知りとても感動しました。

2つ目は、平和記念公園内の見学です。その中でも特に印象に残ったものは、原爆ドームです。原爆が投下される前までの「広島県産業奨励館」の写真と見比べました。鉄で作られていた枠組みのようなものはほとんどが歪んでいました。また、コンクリートで作られた壁や天井は一部が爆風で剥がれて無くなっている状態を自分の目で見て、教科書やテレビで見るときと違い、とても迫力がありました。1つの原爆が落とされたただけであのような風になってしまうのだと思うととても怖かったです。しかし、原爆ドームの周りに生えていた草木はとてもきれいで、頑張っている姿に勇気をもたらすことができました。

3つ目は、平和記念式典です。国内だけでも大勢の人が来ますが、今年は原爆投下から80年を迎えたこともあり、海外から過去最多の約120もの国と地域の大使などの関係者が参列していて驚きました。平和記念式典では特に、「こども代表」の2人による平和への誓いが印象に残っています。「One voice 例え一つの声でも、学んだ事実に思いを込めて伝えれば、変化をもたらすことができるはずです。」僕よりも小さな子どもたちが平和についてこんなにも考えていると知り、とても驚きました。僕も様々なことに変化をもたらすことができるような行動をしていきたいです。

4つ目は、平和記念式典後の参列者へのインタビューのときです。3人の方にインタビューを行ったのですが、2人目と3人目の方が特に印象に残っています。2人目

の方は外国人の方でした。その人は、日本に住んでいるのですが、質問の一つ一つに丁寧に熱く語って答えてくれました。その人の話を聞いたことで、日本人だけでなく外国の人も原爆があったことで平和について考えていると知りました。3人目の方は、東広島市から訪れてきた高齢の方だったのですが、「自分が考える『平和』とはどんなものか？」という質問をしたときに、「平和が一番難しい」という答えに、とても共感することができました。人間は、些細なことで喧嘩をしてしまいます。このようなことも平和ではないと思いました。もし、相手のことをしっかり考えられ、平和が実現していたのなら世界では戦争や内戦などは起こっていないのではないかと思います。

今回の派遣で、広島に行く前と行った後で広島に対してのイメージが大きく変わりました。原爆ドームや広島記念資料館を自分の目で直に見ることで、戦争や原爆は二度と起こしてはいけない、また、起こさせてもいけないことだと強く思いました。また、広島に原爆が投下されてから80年が経ち、被爆者の人数が減ってきています。さらに、被爆者の方々が体験したこと、記憶に残っていることの話の聞ける機会も少なくなってきました。そのため、被爆者の方々から聞いた話を、僕たちが次の世代に繋げていくために、語り継いでいかなければならないと思いました。そこで、僕は自分が伝えられる言葉で原爆について目で見たと耳で聞いたことを、僕たちの次の世代へと繋げていきたいです。

最後に、我孫子市の代表として広島を訪れたこの3日間は、僕にとってとても貴重な体験になりました。この体験を忘れず、同じような悲劇が二度と繰り返されないために戦争や原爆の記憶を多くの人に伝えていきます。

『広島派遣を終えて』

私がこの派遣に参加した理由が、先輩のリレー講座やテレビで伝えられていた「世界最初の一発の原子爆弾の恐ろしさ」でした。戦争はよくないこと、二度としてはいけないこと、このような言葉が繰り返され、私もこの目で見て感じて確かめたいと思い参加しました。



1日目は広島に着いた後、原爆ドームや平和記念資料館を見学しました。教科書にも載るほど有名な原爆ドーム。どんなものなのだろうと最初に立ったとき、原爆ドームとその周りを囲った柵の中が1945年の8月6日、午前8時15分のあの瞬間の残酷さを訴えてくるようでした。崩れた状態をあえて残している様子に、地域の人々の強い思いが伝わってきました。

私がさらに衝撃を受けた場所は平和記念資料館です。資料館に入ってから少し奥に進んだところにある様々な物を見て、私は初めて言葉が出ないという感覚を味わいました。焼け焦げたお弁当、血が付いたワンピース、8時15分で止まった時計、瓶のガラスが溶けてくっついている状態のものが展示されていました。それらのどれも他愛ない人の暮らしが一瞬で奪われたであろうものを見た時の衝撃と悲しさは、この先一生忘れることができません。特に一番心に残ったのは1枚の絵でした。被爆した家族が弱っていく様子が描かれた絵を見て、私自身や自分の家族と重ねてしまい思わず息が詰まりました。もし私があその時にこの場所にいたらと考えると、とても恐かったです。

次の日は、広島平和記念式典に参加しました。今年は戦後80年という節目でもあるためか、世界各国から参加した方たちが一番多かったそうです。8時15分の黙とうの時、1分間の中でたくさんの方が頭の中を回りました。原爆によって命を落としてしまった人は今年で約35万人。もう二度とこのようなことが起こりませんようにと願いました。

平和への誓いでは、私より年下の小学6年生の2人が大勢の前で堂々と話している姿に衝撃を受けました。「いつかは訪れる、被爆者のいない世界。」最初のこのセリフを聞いたとき、私たちが派遣された主な目的でもある「たくさんの人に伝える」とい

うことを思い出し、伝えることの重要さを改めて考えさせられました。とても貴重な式典に参加するという経験ができて本当によかったです。

その後、ボランティアの方と実際に被爆された河野さんのお話を聞きました。河野さんはとても優しく、親しみやすい雰囲気がある方でしたが、お話の内容は言葉一つ一つがとても重い内容でした。被爆直後、河野さんはお姉さんを探しに行くために橋を渡るとき、橋の道がすべて人で埋め尽くされ、「熱い、水をくれ」という言葉がたくさんあったとおっしゃっていました。その橋は派遣初日に私たちも通った橋だったため、想像をするととてもぞっとしました。お話の最後の方に、河野さんは「どうかこのことを私たちのような伝承者がいなくなっても決して忘れずに、いつまでも伝えてほしい」と涙ぐみながらおっしゃっていました。思い出すことでさえ辛いはずなのに、こうして私たちにお話ししてくださった分、私たちには伝えていくことで、もう二度とこんなことを起こさせないようにする責任があると強く実感し、当たり前の生活がどれだけ幸せなのか、奇跡なのかを思い知らされました。

この広島派遣を通じて、私の「平和」に対する意識は大きく変わりました。参加する理由になった先輩からのリレー講座で知識として取り入れていましたが、実際の場所に行くことで「事実」として頭に入るようになりました。多くの犠牲や平和を願う人々の努力があるからこそ、今私たちは「平和」を生きることができているのだと思います。

私ができる平和を伝える活動は小さいことかもしれませんが、しかし、今回の経験をもとにして私の身の回りの人やさらに周りの人へと、平和のありがたさ、大切さ、そして被ばく伝承者の方の想いを伝えたいです。1人でも多くの人に、私と同じような衝撃を受けてもっと知りたい、実際に見て感じたいと思ってほしいです。この3日間は、もう二度とない貴重な経験になりました。数年後また、たくさんの経験を得た時に、平和についての様々な想いをもって広島を訪れたいです。

『伝え継ぎ平和を願う』

私は広島派遣事業に参加するにあたって、本を読んだりインターネットで検索したりして、原爆被害についてある程度の知識を持っているつもりでした。しかし、実際に広島で資料館や慰霊碑、被爆地などを巡ってみて、文字を読むだけではわからないことが本当にたくさんあったのだと思いました。



初めて目にした広島は活気があって明るく、観光客の多さが目立ちました。和気あいあいとした風景に、原爆が投下されてなお、このような美しい街を作り上げた人々の強さを感じました。しかし平和記念公園、原爆ドームに到着したとき、決してこの街は80年前の惨状を忘れてなどいないと実感しました。その後の平和記念資料館の見学では、原爆の被害だけではなく、原爆投下当時の政治的な観点や原子爆弾の仕組みも学び、一概にどちらが悪いとも良いとも言えない事実を知りました。しかし実際に被爆後、ケロイドや原爆症に苦しむ被爆者の写真や、被爆後に被爆時の惨状を描かれた絵を見ると、改めて原爆が引き起こした惨い被害と、人々の心に残り続けた傷を実感しました。

2日目に参列した平和記念式典では、予想以上の外国人観光客の多さに驚き、日本以外の多くの人々が原爆に関心を持っていることはすごくいいことだと思いました。また、私より年齢の若い小学生の代表や、これらかの政治を担っていく方々のスピーチが堂々としていて、憧れを抱きました。

その後、平和学習の集いでは、全国各地の中学生と平和事業ボランティアの方のお話を聞くことができました。「平和とはどのような状態か」という議題で話し合いをしたとき、「当たり前前の方が当たり前前ができる」「笑いあえる」などの意見が上がっていました。特に印象に残っている意見で「たとえ核兵器が廃絶されても、核兵器という抑止力がなくなった世界が平和でないなら意味がない」という考えの人がいて、核兵器廃絶を願うだけではなくその先の未来まで見ている、とてもいい意見だと思いました。また、同じ県でも他の県でも、考え方は少しずつ違っていることがわかりました。地域に関係なく、一人一人に考えの違いがあって面白かったです。そして、「平和な未来を作るためにできること」という議題では、それぞれの学校や地域によって取り組んでいる平和事業に違いがあり、「小さい頃から平和学習を行う」「他の国

のことをもっと学ぶ」など様々な意見が上がりました。中には、「先生に自ら進言して平和について考える団体をつくった」という方もいて、平和に対してとても積極的に、前向きに取り組んでいる方がたくさんいて素敵だと思いました。違う地域の学生と話し合うという、派遣事業ならではの取り組みができてよかったです。

3日目の平和記念資料館見学では、被爆からの復興を学ぶことができました。当時政府から後障害に苦しむ被爆者に大きな補助が無いなかでも町を復興し、過去のクラスメイトのために署名運動を行い、広島を観光地としてここまで発展させたところに、当時の人々の努力を感じました。多聞院と本川小学校の見学では、戦時中弾丸をつくるために寺の鐘さえ回収されたということを知ったり、原爆の熱線によって溶けた瓶や缶、爆風で唯一残った鉄骨の柱を見たりして、原爆の威力の大きさに改めて恐怖を感じました。

広島派遣事業の3日間で学んだのは、たとえ意見が全く違って、お互いがお互いを知ろうとし、理解しようとする姿勢が大切であるということです。最近の政治的な意見では、核兵器廃絶に反対だという声もあると思います。核兵器をそこまで悪だと思わないという人、そもそも核兵器についてあまり知らないという人も多いのではないでしょうか。平和について、原爆について、どう感じるかというのは人それぞれで、どの考え方が正しいというのではありません。しかし、だからといってお互いの考えを拒絶するのではなく、あくまで他の人の考えも受け入れた上で、自分の意見を持つことが必要なのだと思います。

この派遣事業に参加し、多くのことを学び、考える機会を頂けたことを本当に嬉しく思います。原爆投下から80年の節目の年となり、被爆者の方から直接お話を聞ける機会が少なくなってきました。また、今なお世界では戦争が続き、核兵器の使用が煽られている状況です。だからこそ、未来を作る立場である私達が原爆について学び、考え、感じ、何より次の世代へ伝えてゆくことが大切なのだと思います。リレー講座などの活動を通して、自分にできることから、次に繋げていきます。

■参考資料



▲国立原爆死没者追悼平和祈念館の入り口に設けられた
8時15分を示すモニュメント

- ・令和7年広島平和記念式典における平和宣言、平和への誓い
- ・令和7年長崎平和祈念式典における平和宣言、平和への誓い

我孫子から平和を願う～我孫子市平和事業ブログ～

我孫子市平和事業推進市民会議 インスタグラム

我孫子市の平和事業や平和事業推進市民会議の取り組みについて紹介しています。



ブログ



インスタ